
御狐様のIS日和

あいあむウィーゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御狐様のIS日和

【Nコード】

N7293Y

【作者名】

あいあむウィーゼル

【あらすじ】

女性にしか動かせないパワースーツ「インフィニット・ストラストス」、通称IS。そんな中で世界初の男性IS操縦者、織斑一夏が発見されたというニュースに世界が揺れる中、女神達の学舎に1人の少年が現れる。彼の名は神崎玖楼。『世界最強』の高校教師であつた……。これは『魔法先生ネギま！ 御狐様が見てる』の逆転作品です。ついでに言うと、これは作者が書きたいと思った自己満足要素が詰まっておりますので、タグを見て「無理だ」と判断された方はお帰りください。

第1話：新世代型“疑似”子供先生、ここに復活（前書き）

えー、前置きもなくやっちゃいました。

「御狐様」のIS版。つまり、逆転版です。

御狐様ではネギまを舞台にしましたが、こっちでは逆です。ISを舞台に頑張って貰います。

玖楼のイメージはあっちと同じですが、その最強さがパワーアップしております。

ちなみに、私がイメージする最強教師は「等身大の光の巨人」と称されるあの人です。あそこまで何もかも力尽くでぶっ飛ばしはしません、それくらい強いのでご注意を。

第1話：新世代型“疑似”子供先生、ここに復活

やあ、ボクは神崎玖楼。ごく普通の専業主夫だ。

「そなたを『普通』と形容すれば、間違いなく常識が破綻するじゃろうな」

うっさい、そこ黙れ。

ソファに寝転んだままの妻、瑪瑙にそうツッコみつつも、手を休めない。

ちなみに、今日のご飯は鶏ムネ肉の竜田揚げ。

ムネ肉は安いんだけど、パサついて美味しくない。そこで調理の前にサラダ油につけ込んでおくのがポイントだ。こうする事でパサつきが無くなる。

醤油とお酒、それから擦ったんにくを合わせたタレで下味を付け、小麦粉をまぶしてカラッと揚げる。

「ほら、出来たよ」

「うむ」

瑪瑙が立ち上がると、椅子に座る。

ボクも出来上がったばかりのご飯をテーブルに並べ、同じく椅子につく。

「ところで玖楼。就職するというのは本当か？」

「耳が早いね」

就職というよりも、復職に近いかな。

数年前まで教職に就いていたボクだけでも、数年前のとある事件で怪我をして以来、療養中。

怪我自体はもう癒えているから、復帰しようと思えばいつでも復帰出来るわけだけど。

もちろん年単位で遠ざかる事は分かっていたから、前の職場には自主退職という形で辞めた事になっている。

「最初は断ろうと思ったんだけど、内容が内容だからね。それに轡木さん直々に頼まれちゃったし」

「……………轡木じゃと？」

「そ、轡木十蔵さん」

IS学園の学園長……もちろん、表向きの学園長は轡木さんの奥さんが務めている。

普段は気のいい用務員として表に立っているから、本当は彼が学園のトップにいる事を知っているのは、教員や関係者ぐらいって事だ。

で、その轡木さんがこの前訪ねてきたんだけど……。

「復職、ですか？」

目の前の男性、轡木さんから持ちかけられた話に、思わず尋ね返してしまう。

「ええ。お願い出来ませんかね」

「……………しかし、何で自分なんですか？ 言っちゃなんですけど、IS学園でしょう？ だったらISに携わる人間……………うちの妻のよ
うな人間がいいはずです」

……………正直に言うただけど、瑪瑙は絶対人に物を教える立場には向
かない。

ボクは確かにISの知識は多少あるけども、実際にISに乗れるわ
けではない。

だから教えられる事と言えば、普通の中学で教えてるようなカリキ
ュラムぐらいで……………。

「だからこそ、ですよ。……………IS学園はIS操縦者を育成するた
めの教育機関です。教育内容もISに関連する事に偏ってしまいま
す」

「……………まあ、それでちょっと前に叩かれてましたしね」

基礎学力の低下。IS学園に関する事だけでなく、全国的にも問題
となっている。

特にIS学園は今、轡木さんが言った通りに教育内容が偏っている
ために、普通校と比べて基礎学力の平均が低い。

でも、その事にしただってわざわざこうやって主夫してるボクを引っ張り出さなくても、そっち方面でやり取りして普通教師を回してもらえばいいはず。

「……………要するに、それだけじゃないって事ですか？」

「相変わらず、察しがいいですね」

「いえいえ」

にこやかに応対しつつ、轡木さんは何かのファイルを取り出した。

どうやらこれを読んで欲しいらしい。受け取ると、それに挟まれていた書類に目を通す。……………あれ、この子って。

「織斑一夏……………織斑千冬君の弟さん、ですよね？」

「おや、ご存じでしたか」

「元教え子の家族くらい憶えてますよ。それに彼女はちょっと特殊でしたから」

織斑千冬の名を知らぬ者は、この世界でも少ないだろう。

ISの国際大会『モンド・グロッソ』。その第1回大会で、たった1本の剣を手に、世界の頂点へと上り詰めた少女の名前だ。

世界最強とまで呼ばれた彼女だったが、3年前の第2回大会、個人競技の決勝戦を突然放棄。その後、現役から引退したと聞いている。

実を言うと、ボクは彼女の中学時代の担任だったのだよ。驚いた？

「しかし、どうして一夏君が出てくるんです？」

「先日、IS学園の入学試験が行われました。その場で彼は試験用に運び込まれていた機体を起動させたのです」

「……………すみません。もう1度いいですか？」

「織斑一夏君は、世界で初めて発見された男性IS操縦者、というわけです」

……………おおう。もう読めた。

内心ため息を吐きつつも、もう1つの仕事について口にする。

「護衛ですか」

世界初の男性IS操縦者となれば、世界中からの注目を浴びる。

そうなれば、今後の彼の生活が脅かされる。どっかの研究機関に送られてホルマリン漬けか、モルモット扱いか（まあ、そんな事した

ら織斑君（姉）の怒りを買っただろうから、表立って動いたりは出来ないと思うけども）。

少なくとも、今までの通りの平穏な生活は出来なくなる。そのため
の救済策がIS学園行きというわけか。

「本当なら、生徒に潜り込ませる事が出来ればよかったのですが……」

「思春期の男子には辛いところがあるでしょうね」

同年代の女生徒に囲まれ、冷や汗を流す彼の姿。

リアルにそれが想像出来てしまい、思わず苦笑してしまう。

世の男性方からすれば、リアルでハーレム状態なので羨ましいにも程があるだろう（女子校の実態なんてそんなもんじゃないけど）。

それでさらに女生徒を側に置くというのは問題がありすぎる。主に彼の精神面について。

「それで自分に白羽の矢が立ったわけですね？」

「ええ。腕の立つ人物で、尚かつIS学園に入る事の出来る男性……該当するのは君くらいでしたから」

そりゃあね、昔っからちよつと荒っぽい事とは縁があつたから、腕には自信がある。

……でも、それだつたら轡木さんがやればいいじゃないですか。

「いえ、私も年ですからね。さすがに昔と比べると思つように身体が動かないわけですよ」

年は取りたくないものですね、と言いつつもお茶をすすする轡木さん。

嘘つけ、と言いたくなつたけども、お茶と一緒にそれを呑み込む。

画面の向こうのみんな、考えた事は無いか？ どうしてこの人が、護衛も付けずにボクの家にまで1人でやってきたのか。

確かに、この人が実質的なIS学園の経営者だという事を知っている人間は限られる。でも、知っている人は知っている。当然、狙われたりする可能性だつてある。

それなのに何故、護衛を付けないのか。その答えはシンプルイズベスト。「必要無い」からだ。

たかが暗殺者の1人や2人、この人なら……轡木十蔵なら、赤子の手を捻るようにのしてしまうだろう。

「まあ、それはさておき、どうでしょうか？」

……復職する事自体はそこまで問題じゃない。

今のボクはあくまで専業主夫だし、復職出来ないという状況ではない。

でも、復職せずともいい。実際、瑪瑙は高給取りだから生活には困っていないから。

要するに、「どちらを選ぶにしても問題は無い」のだ。

(…………でも)

実はまだ、引っかかっているところがある。

織斑一夏君がIS学園の入試会場にて、ISを動かしたという事実。資料によると、同日に藍越学園の入試も行われており、どうやら彼はそっちを受験するはずだったようだ。

単に会場を間違えて、それでたまたまISが設置されていた部屋に迷い込み、たまたまISに触れてしまった事が発端。そう考えれば楽だけど、そこまで偶然が重なるものなのか。

そもそも、IS学園の受験者は女性だけ。同年代の男性がいたら、受験者なりスタッフなり誰かが「会場間違えてますよ」と声をかけるはず。それにISが保管されているとなれば、警備だって整って

いる。15歳の少年が近づけば、誰だって不審に思う。

そしてISを起動させたのがミソだ。たまたま動かせる“何か”があったとも考えられるが、他にも『誰かが細工していた』とも考えられる。

これらの状況を作る事が出来る存在に、ボクはたった1人だけ心当たりがあった。

「……………分かりました。その話、お引き受けします」

「……………なるほど、あのウサギか」

竜田揚げを口へと運びながら、そう呟く瑠璃。

彼女がウサギと形容する相手、それはISの生みの親……篠ノ之束博士の事だ。

ISの中枢とも言える「ISCコア」は、今も尚ブラックボックスとされており、完全に解析されていない。

何故、男性には動かせず、女性にのみ動かせるのか。

ISCコアにこそ、その謎があるとされているが……真相を知るのは篠ノ之君だけ、というわけだ。

「織斑一夏君の事が全て彼女の仕業かどうかは分からないけど、疑わしいのは事実。……それに」

「それに？」

「……うつん、何でも無い」

まあ、轡木さんの話を受けたのはその事だけじゃない。

教育者として、やっぱり学力低下問題は見過ごせないってところもあつた。

自分1人でどうなるか分からないけど、無為に日常を過ごしてるくらいなら、少しくらい職場復帰してみようと思ったわけだね。

「それに、そろそろ彼の事も隠しきれなくなってくるだろうし……」

委員会からマスコミに圧力をかけているとは言っても、限界がある。

人の口に戸は立てられない。どこか隔絶された場所ならともかく、判明した場所は一般人も踏み入る入試会場。

ボクの私見だと、明日明後日辺りには報道されるんじゃないかな？
どちらにせよ準備自体は整ってるわけだし、抑え込む必要もそろそろ無くなってくるのだから。

「……………しかしIS学園となると、そなたは向こうに住み込む事になるじやろう？」

「まあ、そうなるかな」

学生寮に住むわけにはいかないし、適当なところにテントでも張ろうかと思っただけ。

さすがに、家から通うにはちょっと遠すぎる。片道何時間かかると思う？

そんな事を考えていると、突然瑪瑙が悲痛な叫びを上げる。

「妾はこれからどうやって生きてゆけばいいのじゃ！？ 誰に食事

の支度してもらえばいい？」

知るか。

……なおその後、どうやら職場に住み着いたらしく、定時連絡の時には上の娘と下の息子の引き繋いだ顔を見る事となった。

とりあえずごめん。果てしなくごめん。

第1話：新世代型“疑似”子供先生、ここに復活（後書き）

IS関連で考えてたネタ

1、ISで復讐モノ

主人公が「白騎士事件」で家族を亡くし、復讐を誓うお話。
既に似た話がありますし、書きちゃうと矛盾する部分が出てくる＋よくあるアンチ物になっちゃうかなと思ったので、書くのをやめました。

2、IS×仮面ライダーOOO

一夏を映司のポジションに置いて、原作開始の1年か2年前にオーズとして戦っていた過去捏造モノ。

誘拐事件がきっかけで、映司と似た様な「乾いた」状態になり、どことなく千冬ともギクシャクした関係が続いていた中でアंकに遭遇。已む無くオーズに変身して戦う事に。

鴻上ファウンデーションがオーズのシステムを再現したISを開発。白式でなくそっちに乗る事に。

ヒロインは鈴、もしくは日奈。後に打鉄式をバースのシステムで完成させる話を考えてました。

仮面ライダークロスだと需要があるか不明だったので、ネタとして1話だけ書いたものが存在してます。

3、「BAD END」を練り直した話

誘拐事件がきっかけで、千春の影の人格「千影」が誕生。

千影は「千春を傷つけた」千冬達を嫌うが、千春が抱く千冬達への愛は変わらない。

オリキャラを減らして、束を若干常識人化。束を千春と千影の理解者に。

これはこれで面白いかな〜と思ってますが、やっぱり無理があるかな〜と思っています。

第2話：神崎家の変わらぬ日常（前書き）

神崎家と言っても全員は出てきません。

なお、神崎家の子供達は宝石の名前にちなんでいます。……………傍から

見たら一部DQNネームかもしれませんが。

第2話：神崎家の変わらぬ日常

「と言うわけで、新学期からIS学園で1年生の一般教養科目を担当する事になりました。神崎玖楼です。よろしく」

その人の姿を見た瞬間、凍ってしまったのは不覚としか言い様が無い。

新学期が始まる前、新任の教師が数名来るというので、その紹介の場に立ち会ったが、まさかこの人がいるとは…………。

「や」

啞然としている私に気づいたのか、にこにこしながらそう挨拶してくる神崎先生。

この人は…………何1つ変わっていない。全く変わっていないのがある意味怖い。

「……………神崎、先生」

「織斑君、久しぶりだね。中学卒業以来だから……………もう8年だっけ？」

「ええ。先生も……………その、お変わりないようで」

どうにかその言葉を搾り出す。

「それ褒め言葉として受け取っていいのかな？」

……いえ、他に何を言えと？

だってあなた、あの頃と全く変わって無いじゃないですか。

「あの……神崎先生。織斑先生とお知り合いなんですか？」

と、私の隣にいた山田君が尋ねてくる。

ああ。私の中学時代の恩師……2年と3年の時は担任だった。

「そうなんですか。……あれ？」

私の言葉を聞いて、山田君が首をかしげる。他の教師陣も何やら微妙な顔になり始める。

……どうやら気づいたらしい。私が何故、「変わっていない」とコメントしたのか。

神崎先生は相変わらずにここにしている。山田君が代表して、その質問を投げかける。

「つかぬ事をお聞きますが……………」

「うん？」

「神崎先生って、おいくつですか？」

……………そう。神崎先生は私が中学生だった頃から容姿が全く変わっていない。

しかも見た目が小柄で童顔なので、中学生ぐらいにしか見えない（山田君も大概だが）ので、中学時代もスーツを着ていなければ同級生に見間違えられたくらいだ。

あの頃、生徒の1人が「先生っていくつなんですか？」と問いかけて、その答えを聞いた時の衝撃は今でも憶えている。

今回、山田君達が憶えるであろう衝撃は、あの頃の私より数倍以上である事は間違いない。

「去年が厄年だったから、今年で43だね。ちなみにこれでも子持ちだよ」

「え」

……その瞬間、凄まじい叫びが響き渡った。

「まあ、毎回毎回年齢の事でとやかく驚かれてたからね。もう慣れちゃったよ」

にこにこ笑顔を崩さぬまま、神崎先生が私の後ろを歩く。

同じくその隣を歩く山田君もようやくショックから抜け出せたらしく、苦い笑みを浮かべている。

……気持ちは分かる。あの容姿で四十路はあり得ないと言いたい。それも何か特別な事をしているわけではなく、素であなのだから、女性教師からしてみれば羨ましい以外の何物でもないだろう。

「それにしても神崎先生。何故再び教師に？」

何年か前の同窓会で聞いた話だと、数年前に教職を引退したという。

その時は神崎先生は出席されていなかったで、当人から話を聞く事は無かったのだが……。

「色々あつてね。……まあ、大きな理由は理事長から頼まれたからなんだけど」

ああ、なるほど。

この学園の理事長は表に出る事はあまり無い。そういった事は奥方に任せ、普段は違った形で生徒達と接している。

そして神崎先生だが……私たちでは想像出来ないほど深く深いツテを持っている。理事長と縁があったと言っても不思議では無い。

「それにしても、君も大分変わったものだね」

「……………いえ」

抜き身の刀。

かつて、神崎先生は私をそう例えた。触れるもの全てを切り裂く刀その物だと。

「昔の織斑先生と、そんなに違うんですか？」

「うん。……いや、懐かしいね」

確かに懐かしいけども……私からしてみれば複雑だ。

あの頃の私は、ただ一夏を守る事に必死で、いらぬ敵を作る事もあった。

そんな時にお世話になったのが神崎先生。私の事情を知った上で色々と便宜を図ってくれて……だが、当時の私はそれすらも煩わしく思い、事も在ろうに先生に喧嘩を売った。

……気がつけば、握っていた竹刀は粉々にされ、私は仰向けで倒れていた。

（……………今でも、この人には勝てる気がしないな）

「まあ、それはともかく。これからよろしくお願いします、織斑先生」

そう言って、神崎先生が手を差し出してくる。

少し迷ったが、私はその手を取った。

これからは生徒ではなく、教師として同じ立ち位置で接していく事となる。

……教師の任を勤め上げているかどうか定かではない私が、それをも果たせるか不安だが。

「…………あれ？　ここは」

と、神崎先生が立ち止まる。

その部屋からは何かおどろおどろしい空気というか、とにかく悲痛な雰囲気漂ってきている。

…………どうやら、それに気づいて立ち止まっただらしい。

「そこは生徒会室ですよ」

「いや、プレート出しているからそれは分かるんですけど…………この悲痛な空気は何」

神崎先生の言葉に、私と山田君は顔を見合わせてしまう。

…………あのバカは。まだ立ち直っていなかったのか。

「珊瑚ちゃん、ご飯まだですか？」

「そうじゃ。まだか？」

「……………まだ、すこしまつてて」

私と義母様の声に、珊瑚ちゃんがやや苛つきながら答える。

だって。私は最近忙しくて料理できないし、母様だって料理は壊滅的だし。珊瑚ちゃんは父様と同じで料理上手でしょ？

「ひていしない」

そう言いながらも、フライパンを振るう手を止めない。

……さてさて、ここで自己紹介させていただきます。

私は神崎家長女、神崎琥珀です。年齢は………秘密ですが、主に国内のとある研究所で生体関係のお仕事をしてます。

「ちょっと待て。妾の料理が壊滅的とは何じゃ！」

「あはゝ。母様の料理が美味しかったら、この世の料理全て至高のメニューに掲載されますよ」

「じじつ。おかあさん、りょうりへた」

……あ、何か突き刺さってる。ぐさぐさと聞こえるほど。

ちよつと言い過ぎたかもしれませんね。反省はしています。しかし、後悔はしていません。

今、あそこで哀愁を漂わせてるのが私たち兄妹の母親、神崎瑪瑙。

……どう見ても20代にしか見えませんが、あれでも四十路です。父様と同じ年です。43です。

ああ見えて、母様も私と同じく研究者。分野は違いますが、かなり優秀な方だと言う話です。

そして、今こっちで料理を作ってるのが……。

「りょうりちゅう。はなしかけるな」

神崎家の次男。私たちの末の弟、珊瑚ちゃんです。

容姿と言動こそ幼いですが、兄妹の中では1番の有望株。瑠璃ちゃんと同じか、それ以上の才覚を秘めてるとされています！

…………おつと熱弁しすぎてしまいました。

あとは……………そうそう、ここにいない人達の紹介もしないと。

まず私たちの父様、神崎玖楼。母様と同じ年で、ちょっと前までは専業主夫だったけど、なんやかんやでIS学園の教師になったとか。次に長男の紫水。私たちの兄様で、今どこにいるのか1番不明な人。いい人なんですけど、父様に次ぐトラブル体质で、とにかく運が無い。2年か3年ほど前にも事件に巻き込まれて、仕事クビになったって聞いてますし。

そして私の双子の妹！ マイ・スイート・エンジェル翡翠ちゃん！
！今はイギリスのどこかの貴族さんの家でメイドをしてるって聞いてますけど。うう、もう最後に会ってから1年経つのか？ たまにはお姉ちゃんに会いに来て欲しいな。

……………うん、ちょっとズレました。次行ってみましょう。

最後になったけども、神崎家三女の瑠璃ちゃん。私たち3人の妹で、

珊瑚ちゃんのお姉ちゃん。今はある意味、父様に1番近い位置にいる。と言つのも…………。

（あの子、代表候補生……でしたっけ？ そーゆーのになつたつて聞いてますし）

この前、嬉しそうに報告していましたから。

国家代表の候補生だから、代表候補生。国の次代を担うIS操縦者に、あの子が選ばれたのは姉としても嬉しいと思う。

けど、それはすなわち、IS操縦者養成のための教育機関へ進む事が決定された事であり…………つまり、あの子はIS学園の生徒になる。

……………きっと父様がIS学園の教師になると聞いて、1番喜んでいない。あの子、父親大好き子だから。

この場合、防波堤になるのは母様の役目なんです……………。

「妾…………料理下手じゃないもん。玖楼だって『美味しい』って言うてくれたもん……………」

……………うん、ほっときましょう。

拝啓、本音へ。

友達がファザコン過ぎて困る。何とかして。

「……………瑠璃、もうちょっと落ち着いたら？」

「だって、学校でもパパと会えるんだよ？　楽しみだなあ」

我が友人、神崎瑠璃は極めて重度のファザコンである。

女の子なら小さい頃思うであろう「大きくなったらお父さんのお嫁さんになる！」という野望を、15になった今尚も抱き続けており、虎視眈々と実の父親を狙っている。

最大の敵を実の母親と言ったのけるほど、父親への愛が溢れ出てい

る様を見る度に、正直引く。

それでも友達やめてないのは、やっぱりこの子の事、好きだからだろっな。

(……………さすがに度を超えてるのは引くけど)

父親の事を想いながらくねくねしてるのを見ると、やっぱり気持ち悪くなる。

「それより、簪ちゃんはどうなの？ お姉さんとうまく行ってる？」

突然、くねくねするのをやめて真剣な顔でそう問いかけてくる瑠璃に、思わず返答に困る。

私のお姉ちゃん……………更識楯無は、IS学園の生徒会長で現ロシアの国家代表。

何をやらせても100点満点の超が付くほどの完璧超人。それが周囲からお姉ちゃんに対するイメージ。

そんなお姉ちゃんに私は、どう接していいか分からなかった。

「……………お姉ちゃんなんて、どうでもいい」

「もしかして、まだ仲直りしてないの？」

呆れ顔の瑠璃だけど、私にも譲れないものがある。

1ヶ月ほど前、ひよんな事から瑠璃と知り合ってしばらくして、瑠璃がお姉ちゃんに絡まれた。

本音に聞いた話だと、何でも私と仲良くしている女の子がいるとお姉ちゃんが知って、それでちょっかい出しに行ったらしい。

お姉ちゃんの行動が、私を心配してのものだというのは分かる。

でも、だからと言って友達に「消す」とか物騒な単語を言い放つのはやり過ぎだから、私は悪くない。

「あのお姉さん、すごい「この世の終わり」みたいな顔してたし、相当落ち込んでるんじゃない？」

「あのお姉ちゃんが落ち込む？ まさか」

あれくらいで傷つくんなら、どんなガラスのハートなんだか。

………なお、私は知らない。

あれから1ヶ月間、私に言われた事が原因でお姉ちゃんが真っ白な状態に陥ったため、IS学園生徒会の機能が停滞している事を。

その所為で、お姉ちゃんの仕事を全部虚がしてるので（普段から大半押しつけられてるらしいけど）、虚のストレスが凄い事になってる事を。

そんな事を瑠璃経由で知る事になるのは、数日後の事である。

第2話：神崎家の変わらぬ日常（後書き）

よく分かる人物紹介

神崎玖楼：神崎家父。主人公。教師。合法シヨタ。

神崎瑪瑙：神崎家母。ヒロイン。科学者。基本的にダメ人間。

神崎紫水：神崎家長男。流浪人。トラブル体質。

神崎琥珀：神崎家長女。科学者。腹黒マツド。

神崎翡翠：神崎家次女。メイド。苦勞人。

神崎瑠璃：神崎家三女。代表候補生。重度のファザコン。

神崎珊瑚：神崎家次男。学生。天才肌。

うちの楯無さんはシスコンのイメージが強いです。

Fate風にステータスを考えてみると、こんなスキル持ちです。

シスコン：姉妹に対する愛情度を示すスキル。愛情度によって能力が変化する。

A：姉妹絡みの事柄において、能力が限界以上に上昇するが、その分視野が狭まって空回りしてしまい、（精神的に）自滅する可能性もある。

D：姉妹絡みの事柄において、能力が多少上昇する。

Aは琥珀と束、楯無さん。Dは一夏です。

ちなみに「姉妹」と「兄弟」に入れ替えたブラコンスキルもあり、その場合の千冬はA+を想定しています。

……ええ、完璧に冗談なので本気で受け取らないでください。

ただ、うちの楯無さんはこんな人です。妹の事で暴走してしまい、それで失敗する人だと思ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7293y/>

御狐様のIS日和

2011年11月24日11時53分発行